



Title	関西グローバルヘルスの集い第5回 医療と宗教：サウジアラビアとインドネシアの医療機関の視察報告より
Author(s)	尾崎, 史歩; 丸, 光恵
Citation	目で見えるWHO. 2020, 71, p. 30-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86557
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

関西グローバルヘルスの集い

第5回 医療と宗教

～サウジアラビアとインドネシアの医療機関の視察報告より～



著者：
近畿大学国際学部国際学科
グローバル専攻4年

尾崎 史歩

高校と大学で長期留学を経験。大学在学中に医療分野で国際協力することが目標になり、国際保健を知る。母子保健を卒業論文のテーマとして研究中。

話題提供者：

甲南女子大学 看護リハビリテーション学部
国際看護開発学教授 看護学博士 日本WHO協会理事

丸 光恵

千葉大学看護学部卒業後、国立国際医療研究センター小児病棟
看護師を経て大学教員となる。2014年より現職。

医療における多文化共生の現状と課題

世界でボーダーレス化が進み、日本でも訪日外国人観光客や在留外国人の数が年々増えてきています。私たちが海外を訪れるときと同様、彼らにも日本で不慮の病気や事故にあった場合、多くの不安が残ります。そこには言語面はもちろん、今回テーマになっている宗教だけではなく、文化や価値観、生活信条への配慮や尊重があるかという問題があります。話題提供では、イスラム教世界の目指す「神学と医学の融合」について、丸先生のサウジアラビアとインドネシアの体験を基に、日本ではほとんど浸透していない、イスラム教の教えである「コーラン」の戒律に則る医療行為の例が紹介されました。西洋的身体観では、身体は社会・文化・宗教的意味から脱文脈化したものと考えられがちですが、イスラム教では医療の場であっても身体は社会・文化・宗教的な意味を持っていると考えられており、その見方をとても興味深く感

じました。他にも透析室にコーランが流せるような設備(写真①)、身体が不自由な患者がお祈りの前のお清めをそれぞれの病室やベッドの上で行えるように考えられてあるお清めセット(写真②)など、医療現場における患者の宗教的価値観をサポートできるような仕組みを紹介していただきました。

患者に対する病院環境だけでなく、医療専門職・職員にも同様の配慮が欠かせません。例えば、祈祷に合わせた就業スケジュールや優秀職員へメッカ巡礼の機会を与えるなど様々です。

また、イスラム教圏内で同じ神を信じ、同じ啓典を信仰していたとしても、終末期の治療方針や蘇生の可否など、地域によって、それぞれの医療行為に多様な解釈があり、色々な角度から医療を捉え、同じ医療行為でもその地での文化に適合しているのだと感じた時間でした。

異文化を尊重すること

ワークショップでは、イスラム教徒に
ついてどのような知識や経験があるか

ループごとに話し合ったあと、日本人がIslamophobia(イスラム恐怖症:イスラム教やムスリムに対する憎悪や宗教的偏見のこと)になる可能性はあるかどうか議論しました。ほとんどのチームで可能性はあるとした上で、どうすれば日本でイスラム教が快く受け入れられるのかについて意見交換を行いました。発表は「知るタイミングや方法が大切」、「知識が少ないから嫌悪感が湧く」など自分たちの知識や情報についての意見や、そもそも「多文化の排除はイスラム教に限らない」、「日本人はマイノリティーに対して必要以上になにかしないと、と考える人が多いが、そうではなく、イスラム教を切り口に個人との向き合い方を考えるべき」との意見がありました。

望ましい今後の日本は？

冒頭でも記述したように、日本でも在留外国人や外国人労働者数が増えてきています。丸先生から日本の看護師教育では「日本人による日本人のためだけの看護」を教えている現状があり、多文化看護に関するコンセンサスが未形成ではないか、というご指摘もありました。今回の関西グローバルヘルスの集いでは、「郷にいれば郷に従え」と彼らを日本に染めるばかりではなく、個人の信じるものを尊重し、お互いに住みやすい社会になることを願いたくなるものでした。この集いでも、近いうちに色々なバックグラウンドを持った人たちと交流できるようになるといいなと思います。



写真① コーランを流すためのスピーカー



写真② ベッドで祈祷を行うためのお清めセット